

## 初代松本医学専門学校長 竹内松

## 次郎先生創業の苦難とその功績を

偲んで

穴 田 秀 男

いまから約四五年前、戦争たけなわの昭和十九年創設の松本医学専門学校長竹内松次郎先生は、すでにその頃から医学教育の行末を見通し、傑出した感覚で卒先垂範、偉大な功績を残されたことを追憶し、将来の医学教育刷新の参考に資せんとするものである。

先生は福井県の出身で、同郷の大先輩土肥慶蔵先生および熊本古城医学学校出身の緒方正規先生の薫陶を受けられ、大正九年東京帝国大学医学部教授となられ、細菌学の草分けとして不滅の業績を残された。昭和十九年定年と同時に松本医学専門学校長に就任されたのである。筆者は当時旧制名古屋高等商業学校教授であったが、急に松本医学専門学校生徒主事に転任を命ぜられ、図らずも竹内先生の許で

創業をともにすることとなり、数年の間先生の部下として仕え、昭和三十五年三月信州大学を退官した。

松本医学専門学校は昭和十九年四月十日、旧制松本高等学校講堂において第一回入学式を挙行した。竹内校長は開口一番「医たる者、まず人たらざるべからず、人たらんとするは一身一家のために非ず、医を学ぶもまたもとより同断なり。諸君は、すべからく徹底せる国家観念を持すべし。人たらんとする者、すべからく恩を知るべし。恩を知らざるものは人に非ず。知恩は報恩への努力の念を喚起するものなり。……学を修むるに方り、すべからく常に前方最高峰に着眼すべく、小成に安んずべからず。松本市にては、坐して、常念、槍、穂高、乗鞍の諸岳を眺め得るも、松本市にては望み得ざる富嶽の存在を思うべし。……余は諸君とともに身を修めん、諸君とともに、邪念を去りて、正しきに就かん。諸君とともに医学の最高峰に向って進まん。しこうして松本をしてやがてドイツのハイデルベルクたらしめたい。人生最大の収穫を日本国家に捧げんがために」と約四〇分にわたり声涙ともに下る訓示をされた。満堂の教職員、父兄、学生に深い感銘を与えた。

その後学校は昇格して松本医科大学となり、やがて総合大学となって信州大学と改称することに内定していた。その頃不運にも二回の失火で校舎の一部を焼失し、また大学の裏を流れる女羽鳥川の氾濫で学園は大洪水に襲われた。学長は少しも怯えることなく東奔西走せられた。優秀な総合大学を建設するには建物や施設よりも人的構成がもっとも大切であることを強調し、その構想を具体的に公表せられた。このことが禍して、がぜん学長排斥運動が勃発した。たまたま先生の郷里の福井県民がこのことを知り、福井大学初代学長として先生を迎えんことを決議した。先生は信州をして医学の最高峰たらしめたいと非常な熱意をもってすべてに処してこられたのであるが、ついに建設途上で松本を去り福井大学学長に就任せられたことはかえすがえすも残念であった。

しかし先生が松本を去られた翌年の昭和二十四年三月、はじめて松本医専第一回生一一六名が卒業し、医師国家試験を受験した。その結果は既設の有名大学を凌駕して全員合格した。第二回も一三三名全員合格、第三回生も一〇一名全員合格、あとを継いだ松本医科大学生も、第一回から

第三回まで一一六名全員合格、信州大学となってからも、第一回生五八名も全部合格、連続七回の医師国家試験に五二四名、一名の落伍者もなく、この輝かしい業績はすべて竹内先生在任中の入学生であった。

卒業生諸君の努力はもちろんであるが、混乱と廃墟の中から立ちあがった竹内松次郎先生の堅忍不拔の指導力と燃ゆるがごとき情熱のしからしめたものといまさらながら満腔の敬意を表したい。

先生は昭和五十二年七月二十七日、九十四歳の長寿を以て、「十松」の号にふさわしく、松樹亭々たる東京練馬の邸宅で眠るがごとくこの世を去られた。

遺言により郷里福井県武生市と、淑子夫人の郷里福岡県英彦山の頂上に分骨して埋葬されているが、移りゆく世界の大勢と医学界の進展を見守っておられることを確信し、限りなき御冥福を祈りたい。

(杏林大学医学部客員教授)